

# ふるさと “風”

第51号 (2010年8月)

風に吹かれて (31)

白井啓治

『熱波に揺れて真紅に染めて百日紅』

花かげにミューと鳴く』

先月号の「風語り」の欄に『庭の雑草の中に野良猫の死んでおる』という一行の詩を書いたのであったが、猛暑の続くなか百日紅の花が例年になく真つ赤な色を染めて咲いた。

この百日紅の根本に庭の雑草に行き倒れ、死暮れていた野良猫を埋めてやり、夏には真赤な花を咲かせろ、と言った所為なのだろうか、曼珠沙華のような色を染めた花をひらかせた。しかし、この赤の色は、今年の猛烈な熱波には良く似合っている。そして、赤の色の間からミューと猫の鳴き声が聞こえてくるような気持ちにさせられた。

先日の事、実に懐かしい言葉を耳にした。「アバンギャルド」である。革新的前衛とでも訳したらいいのであろうか…。アバンギャルドとは第一次大戦の頃にヨーロッパに始まった前衛的芸術運動である。つまり、既成の観念や流派、型等を否定し、破壊して新しい表現を創ろうという動き、活動の事を言う。

この「アバンギャルド」なる言葉は、60年代、

70年代中頃までは何かにつけて使われていたように思うが、今は死語にも近い言葉になってしまった。だが、今突然のようにこの言葉を思い起こされてみると、実に大切な言葉であったと思う。

当ふるさと風の会は、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を軸に集まった者達の志述を発表する会であるが、その目指すところものは「ふるさとアバンギャルドである」という事が出来る。

しかし、アバンギャルドとは、歴史的文化を有している所に生まれるもので、歴史的文化が角質化し自由で自在な柔軟性を失ない新しい創造を生み出せなくなってきた時に起こる破壊的衝動であると言え。その意味では、ルネサンス活動と同種のものである。

ところが、この石岡という地を覗てみると、その歴史や継承される文化は、都合のよい改ざんの繰り返しで、その都度もとの歴史を捨ててしまったといえる。こうした現在にとつての不都合を何もかも捨ててしまふような風土の中で、しかも逼塞し過ぎた中で、アバンギャルドを志向したとしても、それが果たせるのかは全くの不問であった。

しかし、ふるさと風の会を振り返ってみると、打田昇三兄の打ちたたてた打田史学としての「歴史エッセイ物語」、兼平ちえこ聖女の「風のことば絵」、

小林幸枝聖女の手話を基軸とした「朗読舞」などは、ふるさとルネサンスを越えた、「ふるさとアバンギャルド」であろうと思う。これは、ふるさとの文化が消滅しない限り後人に良き刺激を与え続ける文化遺産であろうと思う。

ふるさとアバンギャルドといえば、5月号から入稿頂いている鈴木健聖人こそ大先達であろう。小生、鈴木聖人との面識はずっと後になるのであるが、石岡に来て、歴史の里とは言いながらその市史を見ても貧しい物語しかない(物語の内包しない)ことに失望した中で、何気なく本屋で出会った聖人の著書に、歴史の里にふさわしいアバンギャルドに遭遇した思いにさせられたのであった。その大先達者から原稿を寄せられるようになった当「ふるさと風」も、なかなかどうして大したものではないかと、自画自賛である。

何とも大袈裟な話になってしまった。書いていて些か照れくさくなってしまった。しかし、いかなる制約も受けないで、言いたい事を述べるのが本紙である。

日の移ろう速さに些か戸惑っている昨今である。ことば座六月公演の時に母が命を終え、公演後に慌ただしく家族葬を済ませ、先日はゲリラ豪雨の中、納骨をすませた。そして息つく暇もなく、11月公演の台本執筆のために、猛暑の中、難台山に登ってきた。

じっくり構想を練る暇も与えられず、もう8月号の会報の編集である。棺の中の母の顔を思い出してみると、慌ただしい時の移ろいを実感しているうちは、まだやらなければならぬ何かがあるからなのだろうと思う。

## 新治 筑波を過ぎて…

鈴木 健

町村合併の話しの続き。

県内には新治郡新治村（現土浦市・新治は消滅）、新治郡千代田町新治（旧新治村、現かすみがうら市新治）、真壁郡協和村新治（旧新治村、現筑西市新治）と、三カ所に新治があった。土浦市に合併した新治村は戦後の生まれ。千代田の新治は平安・鎌倉時代の荒張（アラハリ）にさかのぼる。協和町の新治は『常陸国風土記』（七二〇年）にその由来が載り、もっとも古く、しかもそれは、『古事記』（七二二年）にも、次のように書かれている。

「倭建命（やまとたけるのみこと）」「荒夫琉蝦夷（あらぶるえみし・頭注<sup>二</sup>いまのアイヌの祖先とされる）等（ども）を言向（ことむ）け、亦山河の荒ぶる神等（かみども）を平和（やは）して、」「甲斐に出でまして、酒折宮（さかおりのみや）に坐（ま）しし時、歌日（うた）ひたまひしく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

とうたひたまひき、爾に其の御火焼（みひたき）の老人（おきな）、御歌に続きて歌日ひしく、

かがなべて、夜には九夜 日には十日を

とうたひき。是を以ちて其の老人を誉めて、即ち東の国造（くにのみやつこ）を給ひき。」

ヤマトタケルがオラホの新治や筑波を歌ったということ、茨城の人たちはこの一節が大のお気に入りなのだが、それで満足している。また、国文学者たちも、これが連歌のはじまりである。連歌を「筑波の道」というのはこれによる。それにちなんで筑波を連歌岳という。悲劇を前にしたつかの間のやすらぎの語らいである。というようなことで、通り過ぎる。しかし、どうも話しが変だ。

タケルの歌に、十日たちましたと歌で答えるだけで、誉められて国造（今の県知事）に任命されたというのは理解しがたいし、それだけのことなら、わざわざ記事にすることもなからうと思う。これは単なる問答ではなく、クイズのやりとりではなからうか。『日本書紀』（七二〇年）を見ると、その疑問が確信になった。そこにはつぎのように載っている。

「是の夜、歌を以て侍者（さむらひ）ひとに問ひて曰はく。

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

諸（もろもろ）の侍者、え答へ言（も）さず。時に乗燭者（ひともせるもの）有り。王（み）この歌（み）うたの末に續けて、歌（うた）よみして曰（も）さく、

日日（か）か並べて 夜には九夜 日には十日を  
即ち乗燭人の聡（さと）りを美め（ほ）めたまひて  
敦（あつく）賞（たま）ものす。」

「歌を以つて」「問ひ」を出したが、並み居る従者たちは「え答へ言さず」。そこに一人だけ正解者があったので、その聡明さをほめてあつく賞を与えたという。これはまぎれもなく懸賞クイズである。ところで「幾夜か寝つる」という問いには、

「○夜」とするのが正解であるはずなのに、「○夜○日」という答えが正解だという。これはどうしたことか。じつは「幾夜か」の「か」にトリックがあった。「寝つる」という句を利かせておいて、「夜か」の「か」は疑問の助詞と思ひこませ、「○夜」という方へ答えを誘導しておく。その実「幾夜か」の「か」は「五日」などの「日（か）」。したがって「幾夜か」は「幾夜日」で「○夜○日」が正解になる。そのところを原文で確かめてみる。

『古事記』では、「伊久用加（イクヨカ）」「許能加（コノカ）」「登衰加（トヲカ）」。『書紀』では、「異玖用伽（イクヨカ）」「虚虚能伽（ヨコノカ）」「苔塙伽（トヲカ）」で、ともにイクヨカのヨカが見事にコノノヨのヨとトヲカの力に一致している。だから、九夜十日が正解というわけだが、ではなぜ、九夜十日なのか。答えのヒントは「筑波」（原字は『古事記』都久波ツクハ）、『書紀』菟玖波（ツクハ）の「波」に隠されていた。「ハ」は平安時代につくられたヒラカナでは「波」の行書体の「は」、カタカナは「ハ」の変形である「ハ」である。これは「波」と「ハ」がともに同音であることを示す。同時代の『和名抄』に見る地名では在所の違いで「波也之（ハヤシ）」「八也之（ハヤシ）」（林）、「加波乃倍（カハノベ）」「加八乃倍（カハノベ）」（川野辺）、写本の違いで「太奈波太（タナハタ）」「太奈八太（タナハタ）」（たなばた）「須波流（ヌバル）」「須八流（ヌバル）」（すばる）。奈良時代の『万葉集』には「四八津（シハツ）」「八多（ハタ）」等、「波」と「ハ」は同じ発音に使われていた。それによつて「筑波を過ぎて幾夜か」は「八をすぎて幾夜日」ということなので、九夜十日になるわけだ。これはおそらく本邦最古のクイズであろう。だが、これまでえ、それがクイズであることに気づいた人はいなかっただろう。前にも同じようなことを書いたが、某紙の共鳴的な書評以外にはめぼしい反応はなかった。こんなものを書いたり考えたりするのは、烏漣（ラミ）の沙汰というものか。しかし、『古事記』等にはほかに同じようなクイズがはめこまれている気配がある。千三百年たつてもそれに気づかないのでは、太安万呂大人もアイソが尽きるのではなからうか。

どうして世の中は、こんなにも汲汲セカセカの惨めな時代となったのか。のんびりと時が流れ、心にゆとりがあれば至福の時。誰もが望みながら、現実には、あまりにもかけ離れている。

経済成長至上主義。世界の為政者は、誰もが、第一にこの旗印を掲げる。無軌道な自由競争で、個人も会社も国家も、みな、エゴで貫かれている。同時多発エゴ。弱肉強食。野生の原野での生存競争となら変わらない。どうして人類の脳は、こんな外道に走ったのか。

人類の脳容積の増加は、時間と平行して進んだものではない。初期のうちは遅々とした歩み。「火」を用いるようになってから栄養が改善され、急速に容量を増やした。脳が膨らむと、夢も膨らむ。夢は果てしなく広がるが、現実とは大きな開きがある。すると、願望は欲求不満へと直結。労少なくして、多大の収益を夢見る…それは即ち略奪へと繋がる。最初はチョットした食糧の奪い合いから徐々にエスカレート。家族間対立↓部族間闘争↓国家間戦争へと拡大し、武力をもって、弱者をひねりつぶす「侵略」へと発展していった。

【人類が脳容積を増大させた経緯は、進化の時間と並行ではない。今から700万年前、類人猿と枝分かれし、直立二足歩行を始めた当時は、脳容積は今のチンパンジーと同じ300ccほど。それから260万年経ったラミダス猿人（今から440万年前）は、せいぜい350ccで、それから更に、100万年経ったアウストロロピテクスは、500ccとなる。その後、出現する人類最古の石器は、今から250万年前の、エチオピアから出土したオールドワン・タイプの打製石器で、そ

の後、「石斧」など100万年間も全く姿形を変えず、改良の跡が見えない。人類の黎明期は、このように、超スローテンポで文明は進行していく。

しかし、今から180万年前、我々ホモ・サピエンスの生みの親であるヒト属ホモ・エレクトウスが現れたころ、脳容積は600ccであったが、今から40万年前、ホモ・エレクトウス原人が初めて「火」をコントロールし、日常の食べ物に火を通して食べるようになってから、栄養は特段に改善され、急速に脳容積を増大させ、1050ccほどになる。即ち脳容積は、猿人時代520万年間に300cc増え、ホモ科（ヒト属）になって180万年間に800cc増えた計算になる。今から16万年前にホモ・エレクトウスから生まれた我々ホモ・サピエンスの脳容積は、現在1400ccである。】

私に言わせれば、人類は飢餓や天敵との戦いから、長い野生時代に身に付いた習性が本性となり、強欲な奪い合いと、先制攻撃を常習とする形で進化してきた。現代人の犯罪の深層心理は、長い類人猿時代・原人時代の飢餓や天敵との戦いに、原点があると考ええる。そして「火」を用い、栄養が改善され、益々脳容積を増やすと、妄想・空想を一層膨らまし続ける。しかし、現実はその甘くはない。そこで、不足や不便を感じると、脳をフル回転させ、創意工夫を重ね、文明は芽生えていく。

人類の歴史を遡れば、人口の少ないうちは、数家族の少数単位で狩猟採集の遊走生活であった。しかし一万年、メソポタミアで、人類は初めて一定の場所に定着を試み、家を持ち、集落を形成し、自然界の有用な植物を栽培し、動物を飼い馴らして、計画的に食糧を確保できる仕組みを確立する。

食糧を年間平均して確保するためには、保存できるものは、「倉」のような所に貯蔵することになるだ

ろう。当然ネズミなどコソドロが住居の周りに住み着く。すると、本会報第49号で紹介した、人になつき易いリビアママネコが寄ってきて、ネズミを退治してくれる。人類が初めて飼育した動物は、メソポタミアにおける一万年前の、リビアママネコを飼いに馴らしたイエネコであるといわれる。

こうして人類は、遊走生活から定着生活へと変遷すると、食糧の蓄えなど、創意工夫と勤勉さの相違により、集落によって、保存量に差が出てくる。すると長い野生時代、飢餓に苦しんだ経験から、持たざる者は、何とかして余所の物を奪えないか…と思案する。ここに人類の狡猾さ、弱肉強食の本性が発揮され、腕力で奪おうとするもの・それを防ぐための用心棒↓軍隊常備と発展していったのである。

やがて集落は部族団結の形をとり、小規模ながら生命と財産を守るために組織化された「国家」の形に成長し、国家間の対立へと発展していった。そして家族長↓酋長↓国王と規模は拡大し、祖先霊は、厚く信仰され、ついには伝説の「神」にまで祀り上げられていったことだろう。後世の統治者は、自己保身を図るため、祖先霊を絶対化し、一神教の神に祀り上げ、原理主義を確立する。そして他は邪悪なものとして排他主義を貫く（仏教の多神教は例外）。今日、世界各地にみられる宗教対立は、恐らくこんな経過を辿ったに違いない。

国家が強大になれば、個人の権利など、何ほどのものでもない。王家中心主義。一般庶民は、ただただ奴隷か働き蜂。すると、大王は、己の欲望を実現するために、国家権力を乱用して国民を戦争に駆り立て、侵略など強行突破。国民の命など消耗品扱い。

戦場に死体の山を築くなど意に介しない。しかし、平家物語ではないが、奢れる者が永遠に栄えた例（た

めし)はない。戦に敗れた国の民は、領土を失い、残党狩りなど命からがら。誇りを踏みにじられる。しかし復讐心は胸に秘めるから、その連鎖は永遠。

さて、これほどまでに大脳を膨らまし、欲望を膨らましたにもかかわらず、秩序ある生存のための、並行して発達すべき抑制機能は、小規模にしか働かない。人間が他の動物と違い、この世で特殊な優れた生き物であるためには、何事も種として自制でき、コントロールされた社会機能を持たなければならぬ。アリでもハチでも、多くの獣でもみな、集団生活するための社会ルールは、しっかりと守られている。

しかし人類だけは、なぜか己の欲望をコントロールできず、本能に振り回された行動を取る。「蟹は甲に似せて穴を掘る」というが、人は大脳発達のせいで、必要以上の蓄えや設備を持つとする。家も丈夫で広く、食べ物も、災害や気候変動に備え、余分に蓄えようとする。大脳が発達し、大きな夢を持つようになったのは良いが、分相応の抑制機能も並行して進化しないと、片手落ちの怪物になってしまう。まるで、車の両輪が、片方は一円玉なのにもう一方は500円玉。これじゃ車は真っ直ぐに進めない。バランスよく両者が発展してこそ真の進化と言える。ところが人類は、無制限繁殖による人口過剰のため、資源の奪い合いなどケンカばかり。とても、人類は智慧ある生物とは、お世辞にも言いがたい。

【動物行動学者の観察報告によると、カナダの森林オオカミは、シカなど食糧の多寡により、その年のペアリング数(夫婦の組数)を決定するという。もし、食糧不足と、群れ(リーダー)が認識すれば、下位の者に繁殖の機会は与えられない。『オレだって女房持ちたい!子供を持ちたい!』などと勝手なこととは許されない。社会として統制がとられている。

人間は、食糧があるのが無かるうが、子育ての能力があるのが無かるうが、むやみやたら子造り行動だけは勤しむ。結果は人口過剰でケンカが絶えない。無知の野獣などと、人は動物を蔑むが、動物の方が、ずっと物の道理を弁え(わきまを)ている。】

さて、地球より100万年ぐらい文明が先行する星から、宇宙人がやってきて我々を見たら、きつこう言うに違いない。『二足歩行で、頭でつかちのへんな動物が、やたら繁殖し、自分の住む星を汚染し、資源を食いつぶし、自分の子孫さえ満足に生存できない方向に突っ走っている。自分達が悪魔のような、超害獣であることを気づかず、万物の霊長などと、自惚れている。いずれ微生物の逆襲に合い、先は、そう長くはあるまい』と嘲笑うに違いない。

宇宙人に啗われ、そして将来人類を、栄養源として食いつぶすつもりで狙っている強毒の微生物達。宮崎県の口蹄疫じゃないが、ブタでもニワトリでも、致命的な家畜伝染病は無数にある。人間が動物や植物を集中して管理すれば、必ず伝染病がつけ狙ってくる。一か所に集中するということは、仲間同士が互いにストレス源となるからだ。ストレスが溜まれば、抵抗力が落ちる。病気になるやすくなる。

【仲間が増えれば、ストレスを受けるのは人間も同じこと。繊細な神経の持ち主ほど、ストレスにやられる。ストレスは免疫力を低下させる。

『夫婦が仲良く暮らす秘策は……一緒に暮らさないこと』と白川次郎は言っている。】

抗生物質を発明すれば、すぐその耐性菌ができる。微生物はシタタカで、簡単に人類の知能に降参するような弱虫ではない。脳も神経もない単細胞の「粘菌」の塊は、ある化学物質を分泌し情報連絡に使う。有害物があれば集団として避けて通り、食べ物があ

れば直ちに塊としてそこへ移動する。人類は微生物に知能が勝れば「万物の霊長」として私は認める。

さて動物は野生のまま、まばらに野にあれば、殆ど伝染性の病気になることはない。一か所に集中管理するから被害は莫大となる。鯉ヘルペスも鳥インフルエンザもコテンパにやられた。白鳥やツルなど、どこか一か所に集中すれば、もし致命的なインフルエンザなど発生しようものなら一溜まりもない人が観光資源にと野生動物にエサをやり、一か所に動物を集めることは、危険極まりない事である。(絶滅危惧種を救うための保護は別の話。)

このことは、人口の一極集中も同じこと。狭い土地に一千万人も集中する東京など、これまで為政者に智慧があつたとは到底思われぬ。国家の末永い安寧を願うのであれば、首都機能は分散することだ。特に四つものプレートがひしめき合う日本列島は、地震の巣窟であり、巨大津波も狙っている。科学が進歩し、人類は自然を制覇したなどと自惚れているが、いまだ自然のなんたるかを殆ど分かっていない。甘く見ていたら、必ず手痛い反撃を食らう。

さて、なぜにここまで人類は落ちぶれ果てたか? G8とか、G20とか、世界をリードする巨頭が集まって、ガン首並べ、何を協議していることやら。いくら協議を続けようが、それぞれのエゴを貫こうとする基本態度が変わりはない。せいぜい世界からはじかれて、卑屈になつて武器を振り回すワルガキをみんな非難し合うぐらいが関の山。人類の未来を真剣に協議し、地球全体のセキュリティを話し合うなど夢のまた夢。死んだ後のことなど知るもんか。今の今、何とか政権が維持できればそれでOK。

みんな、そんなところだろう。

あまりにも歪な進化を成し遂げた人類は、この辺

でジックリ腰を据えて反省・検討すべきではなからうか。現状維持でさえ窒息状態なのに、さらに拡大成長しなければ納得しない人類の果てしなき欲望。経済が発展すれば、確実に環境は汚染する。地球の収容能力には限界がある。地球という「ゆりかご」から、頭アツカチの怪物が溢れて、落っこちそうだ。火星移住など途方もない。宇宙はそんなに甘くない。宇宙には、我が地球などより遙かに文明の進んだ惑星があるかも知れないが、友好的にしろ、攻撃的にしろ、決して彼等は、地球来訪など企てはしない。

ということは、宇宙では知的生物は、母星を飛び立ち、他へ進出するなど、①道徳的に抑制され、それが守られているか又は、母星を飛び立つほどの技術を獲得する頃は、②知的生物は、自製の利かない内部崩壊で種が絶滅状態に陥っているかのどちらかであろう。今、地球人はその分岐点に差し掛かっていると私は思う。どちらかと言えば②のコントロールの利かない自滅的崩壊寸前のような気がする。

自らの住む環境を、回復不能に近いまでに破壊し、顧みることが知らない。メキシコ湾の原油汚染など人類の奢り・昂ぶりに対する天罰のようなものだ。温暖化による集中豪雨（3日間で200㎜）で、09年8月台湾の山村。なんと、地下84㍎の深さから山肌が深層崩壊を起こし、麓の集落を一気に呑み込んだ。幅1km、長さ3kmにわたり時速100kmの山津波。3階建コンクリート校舎に殆どの人が避難していたが、それさえ跡形もない。150戸550人中、生き残ったのはわずか50人……NHK特報。

これらの現象を振り返ると、地球人は、物の道理を弁えた、自己完結の崇高な知的生物とは、到底言えない。異常に大脳を膨らまし、強欲が突つ張る。お釈迦様の掌から脱出できなかった孫悟空と同じ。

大国が覇権を競い、宇宙までもオレは支配できる……と意気込む姿など、小さな池の中で、ガマガエルが、オレは世界で一番強いんだ……と威張っているようなもの。食糧が少なければ、ミツバチの女王は、産卵数を抑制する。オオカミは子を産まない。イヌワシは卵を2個産むが、1羽は予備の命で、育てるのは必ず1羽のみ。自然界の動物たちがキチンと道を弁えているのに、どうして万物の霊長と、自惚れる人類がそれをできないのか。やはり片手落ちの狂った進化の過程をたどっているというべきか？

別に私はペシミスト（悲観論者）ではない。むしろその逆で楽観論を貫いてきた。世の中、何とかなるさ。どうせなるようにしかならない。慌てるな、自然の成り行きに任せる！これが私の生きざま。そう考えて今日まで生きてきた。

しかし、世界の動き・人の基本的な行動様式など見ると、人類とは、到底そんなおめでたい、お人よしの生き物ではない。歴史が示すとおり、特に権力を握った者など、己の欲望を達成するために、どんなことでもする。極悪ではなくとも、人の弱みに付け込んで、千載一遇のチャンスなどと暗躍したりするコキタナイ動物のようだ。

【芸術や科学ましてや、人道活動などに従事する人々にとつて、人類が至な進化を遂げているなど言われたら、『ふざけるな』と言いたいだろう。しかし、人類行動をトータルで見たととき、反社会活動、犯罪、テロ、戦争など根深く浸透しており、大脳が発達し、知的進化を遂げた一方、欲望をコントロールできない著しいマイナス面も、私の印象から消えない。】

そういう前提の下に、先を考えると、人類の行き着く先は、背筋が凍るような恐ろしい姿が目に見えよう。欲望達成のために、経済発展至上主義者共によ

り、この惑星は、無残な姿となり、海面は100㍎も上昇し、熱帯病は蔓延し、豊かな森は砂漠化する。植物が減れば酸素濃度が薄くなる。多くの生物は、酸欠で瀕死の状態。酸性雨は、海水のPHを酸性に変え、サンゴは白化、生態系が崩れ、死の海となる。科学者達はそれを恐れ、国連などに緊急対策を呼び掛けるが、経済至上主義者らは目先の利益追求がまず先。相手にしてくれない。（あまりにも反時勢の声で吼え続けると、菅原もいよいよアルツハイマーか……と言われるかもしれないが、構わない。）

こう考えてみると、全生物の90%も死滅した事件が過去5億年間に5回もあったが、恐るべき第6回目人類は、自らの手で引き起こしそうだ。そうなれば多細胞生物の殆どは、この世から姿を消すことになるだろう。残りは、環境の激変に果敢に遺伝子変換をして対応する微生物だけとなる。

地球の生命の歴史38億年のうち、単細胞から多細胞に進化するのに、実に28億年もかかっている。それを一からまたやり直すのか。尤も我が太陽は核融合の燃料を使い果たし、あと50億年持たない。そしてその前に我が天の川銀河は、あと23億年経てば、お隣のアンドロメダ銀河と衝突。太陽も地球も、コッパミジンに砕けて宇宙の灰塵と化し、霧散することであろう。ま、科学者には、しばしば騙されるから、あまり先のことなど、考えない方が良いか。

さてそうなると、近未来の危機切迫など、こんな片田舎のオヤジが、クヨクヨ考えてもしょうがない。それこそ、なるようになれ。私はあと10年も生きれば御の字だ。全人類と、子や孫の行く末は、かわいそうだが、自分の人生は、臨機応変に、自分で切り開いて、生きてゆけ！

# 朗読舞劇団 『ことば座』

劇団ことば座は、ふるさと（常世の国）に紡がれてきた歴史・文化を大切に明日の希望としての物語を常世の国に生まれた舞台表現、「朗読舞」に表現していく劇団です。

朗読を「手話を基軸とした舞」に演じる小林幸枝は世界でただ一人の朗読舞女優です。

## 朗読劇・朗読舞劇研究生募集!!

### あなたの隠れた才能をことば座に発見してみませんか

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優および朗読舞俳優志望者を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂き、研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

#### ◎募集要項

募集：朗読劇&朗読舞劇俳優養成コース

募集人員：6名程度（最大10名まで）※面接及び朗読と簡単な表現試験有り

養成期間：1年間（入塾は随時受付しています）

指導月4～6回

受講料：月額30,000円（全・半納割引有り）

※詳しくは、ことば座事務局（担当：白井）までお問い合わせください。

# 座』

ふる里とは、物語の降る里です。

里に降り落ちた物語は未来への道標。

守るべきは里に降り落ちた物語を確りと伝えることです。

ことば座は、里に降り落ちてきた物語を朗読と手話を基軸とした舞（朗読舞）に表現し、明日の夢を伝える劇団です。

「ことば(言葉)」とは、「心を口に繋らす」ことをいいますが、心とは真実、口は表現の手段、葉は紡ぐことをいいます。「ことば座」は、この言葉の原義に基づいて、物語に紡がれてある真実としての未来の夢を朗読と手話を基軸とした舞という二つの言語によって、自由で自在な舞台表現を創造しています。ことば座が取組んでいる朗読舞及び朗読舞劇は、日本の古典芸能である能や人形浄瑠璃をヒントに、語り朗読を手話言語をベースにした舞技で演じるというもので、脚本：演出家の白井啓治が舞女優小林幸枝のために創案した石岡に生まれた新しい舞台表現です。

ギター文化館発 「常世の国の恋物語百」(第25話)

**第20回定期公演は、11月12日、13日、14日です。**

入場料 3000円 前売チケットはギター文化館(0299-46-2457)

いしおか補聴器(0299-24-3881)で取り扱っております。

舞台衣装等のデザイン・製作に興味があり、ことば座にボランティア参加して頂ける人、募集しております。

現在舞台背景画担当として「風のことば絵作家」の兼平ちえこさん、舞台装束として小林一男さんの参加を頂いております。

興味のある方、事務局の白井まで連絡下さい。

ことば座 〒316-0913 石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

E-mail: shirais3maple.ocn.ne.jp

## 古代エジプト文明の風にふかれて (5)

兼平ちえこ

三月八日〜十五日エジプト周遊八日間の旅をお伝えして、今回で五回目となります。旅も後半に入ります。

ナイルクルーズで巡りたいルクソール以南。青いナイル川と岸辺の風景を楽しみ、気がつけば遺跡の横まで来ている。イベントも盛りだくさんで食事も、すこぶる美味。そんな夢のような旅が出来るのがナイル川豪華客船のクルーズ。これはルクソールからアスワンまでの、船旅と共に遺跡巡りを優雅に楽しむコースである。

しかし私達六十人余りは、二台のバスに揺られ、青いナイル川に寄り添いながら、国土の九割五分が砂漠と言われている大地を、ナイルの恵み豊かな交易の地、アスワンに向かう。

走る事、百十km、そこはエドフの町。ハヤブサの神、ホルスを祭るホルス神殿に到着する。第一塔門と中庭の入口には、ハヤブサの姿をした美しいホルス像が迎えてくれた。

建物は神殿建築の基本に忠実に造られ、歴代のファラオが増改築を繰り返した、前回紹介した複雑な構造になっているカルナック神殿とは対照的であるという。

この神殿は紀元前二三七年に建設が始まり紀元前五七年、クレオパトラ女王の父、プトレマイオス十二世の時代に完成したものであった。

高さ三六m、幅七九mもある巨大な塔門にはホルス神とハトホル女神の前で敵を打ち倒すプトレマイオス十二世が描かれてあった。

この塔門の前に立ち、仰ぎ見るとその時代に、

この大きな壁面に描いたレリーフは、建築後に描いたのか、建築前なのか、その手法に驚嘆するばかりである。

エジプトの神殿造りには一定の決まりごとがあるという。神殿の正面には、どっしりとした塔門があり訪れた人はそこをくぐって神々の世界へと導かれる。入ってすぐの中庭には陽光きらめく開放的な空間で、次の列柱室には巨大な柱が林立し、窓から差し込む光に、レリーフが浮かび上がる。

さらに奥の至聖所には神がおられ、神秘的なほの暗い空間となっていて、奥に進むにつれて開口部が減り、暗くなっていくと同時に床は高く、天井は低くなっていく。

日差しが強いエジプトで、光の量をコントロールして、それぞれの場に相応しい明るさと暗さを演出、神々の威厳を高めているのが、神殿の基本構造ということであった。

この基本をきっちりおさえたこのホルス神殿の至聖所の周囲もレリーフで埋め尽くされていた。

又、走ること八十km。

ナイル川畔の小高い丘の上にあるコム・オンボ神殿。この神殿は中心線から左右に分かれ、上エジプトの神であるハヤブサの神ハロエリス(向かって左側)と、コム・オンボの神であるソベク神(向かって右側)の二神を祭る珍しい二重構造となっている。

現在の建物はグレコ・ローマン時代に建築されたもので、さまざまな様式が用いられた柱頭や、この神殿にはホスピタルがあったとされ、医療用具や出産シーンなどの変わったレリーフが残されていた。

又、ナイル川の氾濫を予知するために作られた

暦で一年を十二ヶ月、三六五日とする現在の暦の基礎となった太陽暦のレリーフが目をついた。夕方から夜にかけてライトアップされ、秀麗な姿を見せてくれるそうである。その姿を思い浮かべながらコム・オンボ神殿をあとに、約四十五km走りアスワン市内に入る。

本日の宿泊先であるリゾートホテルはナイル川に浮かぶ島にあり、アスワンのシンボルともいえるファルーカ(帆かけ船)のクルーズを楽しむことになる。

風に吹かれながら、船上では、舟案内の方の陽気な歌、ノーラ♪、ノーラ♪に合わせ、ホテルまでしばし、広大なナイル川遊覧となった。

夕食も用意された客船内で、夜景や色々なイベントを楽しみながら盛りだくさんであった。

モーニングコールは二時四十五分、就寝を急がなければならぬ。明日はアスワンから約二百八十kmの世界遺産アプシンベル神殿へ向かいます。

・ ナイルの氾濫 国興す

・ 岩手富士のぼっても登っても心秘める ちえこ

### 《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦  
蕎麦会席料理のお店です  
(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが  
皆さんをお迎えいたします。  
営業時間 11:30~15:00  
16:00~18:00  
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 - 43 - 6888

## 難台山と首洗い滝

小林幸枝

十一月公演の題材を何に求めようかと相談されて、悩んでいたところ、いしおか補聴器で毎月第二土曜日に行われている朗読会で、打田昇三作「興亡の連鎖」(五)として難台山城の攻防戦にまつわる話しが語られた。それで、難台山城の戦を題材にしてみてもいいと思った。何かが見つかるのではと茨城の滝を紹介する写真集を開いたところ、難台山の岩間側の川に首洗い滝というのがあった。早速、脚本家に話したら、見に行こうという事になり、出かけてきた。

難台山には幾筋もの川が流れており、首洗い滝は見つけられなかったが、小さな滝が幾つもあり、その一つ一つが首洗いの滝に見えた。

急な斜面と、獣道の様な道しかなく、はげで読みにくくなった案内杭には、小田五郎藤綱の碑がその先にあるように書いてあったが、おそらく難台山城跡でもあるのだろう。急な獣道で雑草が酷いので、城跡まで登るのを断念した。

小田五郎藤綱の奥方が幼い子供を連れて、逃げのびる時、小枝やスキの葉に足を傷つけられ、その血が飛び散って、難台山のスキには、赤い血の斑点が付いたものがあるという伝説があると言いが、登山靴でなければ本当に切り傷だらけになる山道だった。

藤綱の妻と子供が逃げのびてきた道は、私達が登った道ではなく、先ず八郷側に落ちのび、迂回しながら岩間に行ったのだそうだ。石岡市側には有明中学校の傍にある「有明の松」の話しか残されていないけれど、岩間の方には「難台山の赤いスキ」などの幾つかの伝え話が残されている。

す。

ちよつと中途半端なハンティングの山登りでしたが、翌日、打田さんが調べてくださったという難台山合戦余話の資料をみせてもらい、大変面白かった。脚本家の見てきた様な嘘をどのようにつくのか楽しみです。

首洗いの滝の枝に、洗った武士の白い顔が幾つもぶら下がっていて、白髪を振りかざした老女が真赤な舌を出して笑っている話しが出来あがるのかな? などと思ってみましたが、恋物語だからもつと綺麗で、可憐な話しになるのだろうなどと、書き上げるのを楽しみに待っています。

## 風はうごく

伊東弓子

諸行無常、鎖国をしていた江戸時代の玉里の御留川、宇宙に行こうとしている現代の霞ヶ浦に吹く風は、変わっていて当然と分かっている。だからこそ水辺を取り巻く故郷の地を尋ねて、過去に吹いた風、今の空気、未来にどういう風が吹こうとしているのか合って見たいと思ひ出かけることにした。御留川(内川)二十四ヶ所、御川筋(外川)十六ヶ所を一日で廻ろうと、欲張りな大荷物と背負つての出発だ。土地土地でゆっくり話しをする暇はない。お粗末だが我流の探索方法で進めることにした。

漁と農を分けた堤防は地形を全く変えてしまった。その上を歩いて水辺側から川(漁場)だった場所を見つけてことにした。堤防にある樋管、樋門、舟溜りに漁場だった所の名称や地名が付いて

いないか。水神様なども一つの手掛かりになるかも知れないと考えた。捕る漁場から養殖場へ、今それならぬ状態の水辺に何かないか、繋ぐものはないかと走り出した。

小漁場 高崎村と三村、石川村境  
御留川(内川)

大川崎、小宮川、からたち、赤坂川、塩くら、  
えびす、ふかつぼ ……高崎村

滝前川、下滝川、渡場川(御蔵下川)、1ノ川、  
岩添やぶく川、十六日川 ……下玉里村

六兵衛川、松下川、浜御川 ……石川村  
芦添川、御殿下川、木の下川くらした

五左衛門川 ……井関村  
ぬかり川、しん川、宮久保上川、宮久保、下  
の川 ……安食村

御川筋(外川)  
柘下川(五衛門川、境川、よた川、川田尻川)  
……安食村

下田尻川、すさき川(前川、よご入江川、天王  
下川、札場川 ……柏崎村

大さき川、なみ川 ……田伏村  
高須川 ……玉造村

札場川、おかま川 ……浜村  
川尻川 ……小川村

「川」というのは漁場又網引場のことである。  
一日係ってやつと一周出来た。尋ねた舟溜りや

えんまには沈みかけた舟、繋がれたまま草々が揺れている舟、コンクリートの上には打ち上げられた魚の死骸、塵、枯草ばかり。動く舟がない、飛び上がる魚がない、人の声が響いてこない、静止した水が空を映している。淀んだ水にじつと糸



をたらず釣り人は多かった。

漁場は大半が水田や蓮田となっていた。数える程の加工場、問屋、生け簀などが漁場の姿を残している所があった。

漁場の名称が揚水樋管や排水樋門にいくつかが残っていた。地名として土地の人が分かっている所もあった。えんま、杜、水神さまに当時を忍ばれる所もあった。

漁場の中には観光化されてモーターボートも何艘かつながれてあった。自然をとり戻そうとしているのか、沢山のお金を投じて堤防のコンクリートを剥がして芝を植え、石で防波堤をつくり、砂浜づくりをしている所もあった。

短時間で過去と現在を見て廻ったが、私の力量では未来に繋げるものは見つからなかった。

現在を憂いてばかりいても仕方がない。四百年から百五十年前、豊かな湖を前にしながら自分達の口に入れる事も十分出来ず、運上金として納めなければならなかった事は大変だったろう。がこれも必要なことだったのだ。

大勢の人がこの水辺周辺で生きてきた事実をみていくと賑わいの中で協力もあり葛藤もあったろうと思う。農漁の生活は自然とのたたかいだし、水の上は御用舟、漁をする舟、運送舟、交通舟、その中で人間模様も様様だったろう。

美しい景観からは胸をときめかす喜びや苦しい労働からの安らぎを貰ったことだろう。自然は又生命を奪う恐ろしさや破壊する恐怖も与えたことだろう。

そういう中で一人一人が生きてきて、私達のいる故郷を作ってきたのだろう。私も歴史を作るメンバーの一人になるのだから、先のことじっくり

考えていこう。

ある漁師の人が力をくれた。

「舟が沢山動いていた。人間がいっぱいいいた。活気があった。人間も川も元気だったよ。俺らは水の上での仕事だったから、一寸間違えば命がねえ。一瞬一瞬が戦いだった。喧嘩もした。上の者だつてくつてかかっていた。仕事は違つても、この気持、生き方は変んねえんじゃねえか。みんなで確り生きていくべよ」

と強い口調で話してくれた。

「風は何で起こる」

「空気が動くから風が吹き出す」

「人が動くとき」

「働くことだ。活動が始まることだ。動かなければ変わらない」

中学時代の先生と大山君の遣り取りを思い出した。

将来への風が起るように思える今日この頃だ。

### 興亡の連鎖(その三)

#### Ⅱ 幼稚なる野心Ⅱ

#### 打田昇三

一般的に「戦争」は幼児の喧嘩と違って、それなりの国際的緊張が原因であろうから一日や二日起きるものではない。日本は昭和十六年の暮に米英両国に宣戦布告をしたが、戦闘機・軍艦・戦車などを動かす石油資源が足りないため、国民には昭和十三年の五月一日から切符制にしていた。米国からも原油を輸入していたと聞くが、その相手と戦争を始めたのであるから、当時の指導者は

現代以上に問題のある人物だったと思われる。

お粗末な前例は中世にもありそれが日本中を合戦に巻き込んだ南北朝時代の発端になっている。

後醍醐天皇による幕府転覆計画が漏れた「正中の変」である。北条政権を倒し、天皇親政を実現するとういう高邁な理想であるから、五年や十年をかけた慎重な準備行動が必要であろうけれども、世の中のことは何も知らない天皇や公家のすることなので全てが拙速で独善的で大雑把になる。

後醍醐天皇の即位から数年経った元亨二年頃に「中宮(準皇后)藤原禧子(よしこ)のご懐妊を祈願する」という口実で、その辺の有名な寺院の高僧たちが宮廷に呼ばれるようになった。当然かも知れないが御祈祷の効き目は全く無く、これは**関東調伏**の呪詛(じゆそ)であろうと噂された。

お祈りが効かないとなると、明治維新を先取りして倒幕運動を展開するしかない。先ず同志を集めようと日野俊基という側近中の側近が諸国を巡ることになり、下手な芝居を打った。どこかの国では本当に漢字が読めなかった総理大臣が居たが、日野俊基は比叡山の僧侶たちが後醍醐天皇に差し出した願書をわざと読み違えたのである。周りに居た公家たちが大笑いしたのを確認して、俊基は「：天皇の御前で恥をさらし、申し訳がないから暫くは田舎に謹慎する：」と言い残して近畿地方を回り、城を築く場所や、頼りになりそうな武将を訪ね歩いた。楠木正成も頼られた一人である。

二年ほどして日野俊基は都へ戻り、幕府に不満を持つ武将が各地に居ると確信して、そのことを密かに後醍醐天皇にも奏上し、九月に行われる有名な北野天満宮の祭礼に乗じてクーデターを決行する計画が固まった。正中元年(一三二四)のこ

とである。そこで同志に加わった中途半端な武士たちが具体的行動を打ち合わせるために何度も会合を開くようになった。しかし堅苦しい会議など開いていると幕府に怪しまれるので、**お気楽な宴会**に見せて芸妓やら遊女を侍らせることにした。

飲み放題の秘密会合は、いつしか**どんちゃん騒ぎ**が主体になり商売上手な遊女集団の過剰サービスは武士たちの奥さんの疑惑を買った。そして一人の武士が、奥さんに宴会の真相を告白してしまったのである。悪いことに奥さんの父親は幕府の警察官僚であったから手回し良く関係者は追討又は捕縛された。後醍醐天皇も黒幕と認定されかけたが、重臣が天皇の勅使として鎌倉へ飛び、現代でも使われる「秘書が勝手にやったことでは知らなかった」という天皇の誓約書を提出し勘弁して貰った。これが「正中の変」である。

しかし助かった張本人は懲りずに同じことを再び考え出した。守り役が心配をして未然に防ごうと鎌倉へ密告したのだが、それが裏目になり幕府は後醍醐天皇の逮捕状を準備した。これが「元弘の乱」の始まりで諸国の武士団が今日は南、明日は北と目まぐるしい変遷の日々を送るのである。

更に、このお粗末な準備で改革が挫折した正中の変から九十年ほど過ぎて、同じように準備不足と状況判断の誤りから折角の挙兵に失敗し、自分が滅亡したばかりか、周りの武將たちを没落に追い込んだ人物がいた。「興亡の連鎖」その一で紹介した室町幕府第四代將軍（義持）の弟・義嗣と鎌倉の執事（管領）上杉氏憲入道禪秀である。

謀反などに同調する仲間の敵は共通しているものだが、この二人にはプラスαがあり相互の関係が微妙であった。足利義嗣は、兄の義持が邪魔で

憎い。父親は自分に將軍職を継がせたいと思っていたのに重臣の反対で実現しなかった。これに対して、禪秀の方は直接の主君である鎌倉管領（公方）足利持氏の横暴な方針に不満があつて辞表を出したところ、慰留もせずクビにされたことを怒っている。そして持氏は、自分こそ京都の將軍に相応しい人物だと思ひ込んでおり將軍の義持が憎いから何とかしたい。目標がバラバラである。

僅か九歳で將軍にまつりあげられた足利義持が十四歳になった應永六年（一三九九）は、収まりかけた南北朝対立の余波やら室町幕府内部の不満が各地に噴出した年である。先ず秋の中頃のこと、「東国を抑えている筈の足利滿兼（持氏の父親）が何か陰謀を企てているのではないか？」という目付役からの報告が鎌倉からもたらされた。

滿兼は足利尊氏の曾孫であり、執事として上杉一族が交代で付いている。本当に謀反なのか：京都の重臣たちが対応に困っている時に、丹後国、近江国、美濃国、摂津国などから鎌倉の動きに同調したと思われる地方武士団の立て籠もりが報告されてきた。どれも放つては置けないが先ず、諸国の謀反を鎮めることにして軍勢を差し向けた。

鎌倉では二十年ほど前にも滿兼の父の氏滿が怪しい行動を取り幕府に睨まれたのだが、その時は鎌倉執事の上杉憲春が死を以て諫めたから大事には至らなかった。今回も無事鎮静化を願って幕府の重臣が鎌倉へ説得に行き、事件をウヤムヤにしたので各地の反乱も部分的抵抗で終ってしまった。

幕府の重臣たちが一安心した頃に今度は西国の大大名である大内義弘が朝鮮の貿易商と商売をしたことを咎められて怒り出した。大内氏は百済国の王子を祖先としている。「昔の親戚との付き合い

が何で悪いのか！」と軍勢を率いて攻めてきた。堺の町に防御陣を築き幕府軍と戦ったのだが簡単に負けてしまった。これを「應永の乱」という。この合戦では賑わっていた堺の町が幕府軍により放火され一万軒と言われた商店街が焼かれた。

この乱で足利義嗣は密かに大内義弘と通じ將軍の座を狙ったと言われる。しかし余りにも呆気なく義弘が負けてしまったために自分の出番が無くて誠に残念ではあったが、それで助かり「大内さんなど知りません」と恍けているしかなかった。我慢すること十六年、その間に自分を可愛がってくれていた父親の足利義滿に死なれて自分の立場が危うくなつたが、一部の重臣に護られ何とか將軍の弟の地位を保持することが出来ていた。

應永二十一年（一四一四）夏、今度は伊勢国で北畠滿雅が兵を挙げた。南北朝の合一から二十年も経つのに今さら抵抗運動は時代遅れであり、幕府軍はこれを一気に潰そうとしたのだが、後醍醐天皇に近かった比叡山の僧兵などが協力しているように容易には攻め滅ぼせない。これを知った義嗣はまたも欲を出して北畠滿雅に接近を図った。

ところが北畠滿雅のほうが世間慣れしていて、幕府側とあっさり和睦してしまつたから義嗣は拳を振り上げたまま宙に浮き、自分の野心を兄である將軍・義持に覚られる心配が出てきた。それが應永二十二年のことである。その頃、遠く離れた筑波山麓の越幡郷では領主の越幡六郎が関東管領・足利持氏に領地を没収される事件が起こり、それが全国版ニュースとなつて放送された。京都でそれを知つた足利義嗣は、思わず「これだ！」と手を打つたのである。直ちに信用の出来る僧侶を呼び、密書を持たせて鎌倉へ向かわせた。

將軍の弟・足利義嗣の使いと称する禅僧の訪問を受けたのは、先ず関東管領・足利持氏の叔父である足利満隆と、持氏に対し越幡六郎の処分に関する議論を申し立てて執事を辞めた足利氏憲（禅秀）の二人であった。手紙には政治家の演説のように美辞麗句で抽象的なことしか書いてなかったが、使者の僧は義嗣の言葉として「將軍・義持を打倒し足利義嗣政権を樹立する」と明言し、満隆、氏憲両将を主要ポストで迎えることを約束した。さらに近江国の六角氏や美濃国の土岐氏など近畿地方の有力大名が義嗣擁立を望んでいとも告げた。

足利満隆は先代鎌倉管領・足利満兼の弟であり、本人に野心は無かったようであるが、甥の持氏が管領職を継ぐ時に謀反の噂を立てられた。以来、陽が当たる場所に出られず、將軍の座を狙って果たせない甥の野望と我儘に困惑しながら、家臣として屈辱的な服従をしている人物である。鎌倉管領職への野心が無い訳でもない。京都の義嗣は其処を狙って謀反を仕掛けてきたのである。

危ない話を持ち込まれた足利満隆は、もう一人の怪しい候補者に挙げられた上杉禅秀を密かに訪ねて「どうしましょう？」と聞いた。禅秀の立場は関東管領の上杉持氏が辞めて再び自分が執事職に戻れば良いので、室町幕府の將軍には特に恨みは無い。しかし革命が成功し「足利義嗣將軍」が実現すれば、自分も鎌倉を飛び出し、都で中央政権の一翼を担うことが出来る。ライバルの山内上杉にも大きく差をつけられる。そのように考えると筑波山麓に居る自分の越幡六郎が領地を没収された事件など、どうでも良くなった。禅秀は訪ねて来た足利満隆に言葉を改めて言った。

「持氏公を恨む関東武士は多く、このままで

は必ず近いうちに反乱が起きます。その時に他人が起こした反乱について行くようでは権力を握れません。満隆様はこれ迄に無実の辱めを受けておられます。その恨みを晴らすためにも都の義嗣公から誘いを受けた今こそ立ちあがるべき時です。私が義嗣公のお誘いを「將軍の御下地」として関東の武將たちに伝えますから、先ず鎌倉管領を討し、さらにその軍勢を率いて都へ上り、ついでに將軍にも替って貰いましょう。」

けしかけられた満隆も承知し、ここに安易な考えの大それた謀反への合意が成立したのである。方向は同じでも目指すゴールは違うという危ないクーデター計画が出来上がり、京都と鎌倉で合戦の準備が密かに進められたのだが、言い出した足利義嗣は幕府の居候であるから、自分の部下は居ない。常日頃、自分を「気の毒」と慰めてくれる武將が何人かいるだけで、表立った活動も出来ないから、結局は鎌倉の満隆と禅秀が主役になり、武將たちに働きかけるのは禅秀の仕事になった。

禅秀は反乱株式会社社長に足利満隆を立てようとしたが、満隆は高齢を理由に息子の持仲を指名した。この持仲という人は養子であり、実は満隆や禅秀がこれから倒そうとしている持氏の弟なのである。幸いにしてと言う言葉は適切ではないが、持仲は養父に良く仕えている人物なので謀反を密告したりはしなかった。しかし秘密の計画を立てる場合の常道にはそぐわない。

應永二十二年の初夏から翌年の秋にかけて反乱軍には凡そ一年間の準備期間が与えられた。上杉禅秀は先ず関東・東北に勢力を張る有力な武士団をリストアップして、日頃の言動や立場などを考慮し鎌倉管領・足利持氏に不平を持つ候補者を把

握した。その武將たちには、出来もしない「マニフェスト」が送られて、「政権交代」を強調する無駄なパンフレットが邪魔になるほど届けられた。それには発起人して管領の実弟である持仲の名があり、都にいる將軍の実弟・義嗣の名も書かれていたから田舎の武將たちは「政権詐欺」とも知らずに「賛成」の申し込みをってしまった。

上杉禅秀には息子たちも居るが、普段から有力武將を婚姻や養子縁組などで結びつけていたので怪しげな勧誘にも無条件で応じた者が多く、賛同した人物は千葉、岩松、渋谷、舞木、大類、倉賀野、丹、武田、小笠原、狩野、曾我、中村、土肥、土屋、那須、宇都宮、結城、石川、南部、葛西、木戸、白河、田村、二階堂などの諸氏、そして常陸国では鎌倉管領に恨みのある越幡六郎と小田の一族に、小栗、行方らの桓武平氏系・大掾一族、さらには佐竹氏の正統相続問題で本流と対立する分家の山入氏などが味方になった。

それらの武將たちには合戦に必要な武器を俵に詰めて鎌倉市大字大懸に在る上杉禅秀の屋敷まで送るように指示が出され、お中元やお歳暮に見せかけて武器を詰めた米俵が大量に運び込まれた。市史には記録されていないが、石岡の府中城などからも大量の武器が鎌倉へ発送されたのである。

應永二十三年（一四一六）九月の初め、大掾満幹は部下を率いて府中城を発ち鎌倉へ向かった。武装はしているが、たいした武器は持っていない軍勢なので、隊列を見送った人々は、まさか反乱軍に加わる一行だとは気付かない。現代は長期間の旅行には荷物を別便で送るらしいが、その起源が室町時代にあつたのか。ともかく各地から手ぶらに近い状態の武士が続々と鎌倉へ向かい、鶴岡

八幡宮の東南にある犬懸の谷間に集まった。

兵力が揃ったところで十月三日の早朝、一気に上杉持氏が住む関東管領の御所へ攻め込むことになった。しかし秘密裡に行動しても合戦の準備ともなれば人目につく。二日の夜に、攻められる側の家臣が上杉禅秀屋敷の慌しい様子に不審を感じて危急を知らせにきた。その時間は、酒好きの持氏が昼間から飲み続けていて丁度、眠くなる時間である。側近が事態を説明しても取りあわない。

「…何を馬鹿なことを言っておる。禅秀は病気で執事の辞表を出したのであるぞ。最近寝込んでだきりと言うではないか。今朝も息子が来て“安静が必要だから病院に行っても面会が出来ない”と愚痴を言っていたではないか…」欠伸をしながらか寝ぼけた声で怒鳴り返した。

「公方！それこそが陰謀なのです。早く此処を立ち退いてください！」

公方とは都の將軍の呼び名で、鎌倉の管領に過ぎない持氏は公方では無いのだが、公方と呼ばせていた。側近が顔色を変えながら言うので、持氏も流石に慌てて、千鳥足を支えられながら当時の執事こと管領の上杉憲基（うえずぎのりもと）が住む山内（やまのうち）館へ逃げ込んだ。逃げ込まれた憲基のほうでも、宴会の延長で酒に酔っていたのだが、青瓢箪のような公方とは違って流石に武将である。飲みかけの酒を気にしながらも「緊急事態！」を宣言して防戦の態勢を整えた。

上杉禅秀の許に集結した軍勢は十万とも十一万とも言われるが誇張した数字であろう。それでも実数はかなりの兵力になる。攻められる側の足利持氏と上杉憲基の手元には僅かな従者と常備軍しかない。何しろ総司令官が敵将の入院を信じて

いたくらいであるから合戦など予期せぬ出来事であり、一年かけて準備した寄せ手には敵わない。本来ならば二日の夜中に攻め込んで謀反は大成功の筈であったが、どういふ理由か、攻撃は三日の朝ということにした。反乱軍に加わった武將たちは至るところに陣を張り、篝火（かがりび）を焚いて夜明けを待った。形としては完全に包囲したのだがその間に敵の守備を固めさせてしまった。

十月三日の朝、朝礼とラジオ体操を済ませた反乱軍は、二手に分かれて足利持氏の御所と上杉憲基の屋敷を襲撃した。持氏は昨夜遅く脱出して上杉邸にいたから無駄なことをした寄せ手も居る。上杉屋敷に向かった軍勢は周りを囲んで矢を射かけたが狭い場所なので、これも効率的には活動出来ない。立て籠もった鎌倉方が果敢に反撃してくるので、一日で攻め落とすことが出来なかった。明けて十月四日は合戦が「臨時休業」になった。

地元・鎌倉で有名な占いの**おばさん**に見て貰ったところ「合戦には日が悪いぞ！」と言われたからである。反乱軍の兵士たちはお土産を買ったり、名所を見物したり寛いだ一日を送った。守備兵の睨み合いは続いている。そして敵方の援軍も徐々にはあるが鎌倉周辺に集まってきている。

然しながら「衆寡敵せず」とか「多勢に無勢」と言うように数千単位の軍勢が数万の敵に囲まれては結果的に勝ち目が無い。戦闘再開から数日間の立て籠もりで上杉憲基の屋敷は陥落し反乱軍は合戦に勝利を収めた。けれども肝腎の敵将二人には逃げられてしまった。足利持氏は小田原経由で箱根山中に隠れた後に駿河国へ行き今川氏に匿って貰った。上杉憲基も箱根山の僧侶の手引きで鎌倉を脱出し自分の領地である越後に隠れたので反

乱そのものには意味が無くなったことになる。

鎌倉を制圧した反乱軍は、総大将に担ぎあげた足利持仲を勝手に「鎌倉公方」として印鑑を作り、関東・甲信越・東北の武將たちに服従するよう命令書を発した。しかし「承知しました」と答えた武士は最初から謀反に加わった者以外に殆ど居なかった。一年をかけて準備した遠大な計画であったが、実行段階の無駄な行動が原因で僅かに鎌倉と小田原を占領しただけの結果に終り、その上に謀反話を持ち込んだ足利満隆は戦死して、上杉禅秀が反乱の首謀者として残されてしまった。

その間にも、本物の鎌倉公方・持氏に味方しようとする武士団が異変を聞いて鎌倉を奪いに来る気配があり、持氏を匿った今川も黙ってはおらず越後に退いた上杉憲基も常陸国北部の佐竹氏と兵力を合わせて反撃に出る気配があった。さらに箱根、小田原、伊豆の僧兵たちも上杉禅秀討伐に意欲を見せている。味方して鎌倉に集まった武將たちは僅か数日の戦いで「反乱軍」として多くの敵に狙われることになってしまった。

一方、最初に陰謀を思い立った京都の足利義嗣は、鎌倉と違って「他力本願」であるから目星をつけた武將を言葉巧みに誘うしかない。義嗣本人は無一文の居候だが、鎌倉の実力者・上杉禅秀が味方だと言えば賛成してくれる大名は居る。室町幕府内でもトップクラスは**やばい**が、会社で言えば常務から部長クラスの武將たちを勧誘することが出来た。越前の斯波、摂津の赤松、丹波の山名、美濃の土岐などの一族が賛同してくれた。

そこ迄はうまくいったのだが、誘った中に仕事のミスから守護職を解任されたばかりの佐々木六角という武將がいた。役目を降ろされ閉門謹慎を

命じられていたから、義嗣は「良い鴨…」とばかりに近づいて大事な計画を打ち明けた。普通の武将なら二つ返事で乗って来る筈なのだが、佐々木一族と言うのは宇多源氏で気位が高い。頼りにはなるのだが源頼朝の旗あげに遅刻してハラハラさせたり、南北朝騒乱の際にも後醍醐天皇や足利尊氏などが手玉に取られた偏屈な武者集団である。とにかく骨太でへそ曲がりな人物が多く、佐々木六角も不遇な際に打ち明けられた謀反計画を逆手にとりて現役復帰を狙い、義嗣に同意するふりをして自分を罰した將軍にそのままを密告した。

直ちに謀反に参加申し込みをした武将たちは捕まり、足利義嗣は京都の寺に幽閉され二年後の正月に殺されてしまった。將軍・義持にしてみれば、自分の椅子を狙う鎌倉の持氏に手を焼いていたから、上杉禪秀がこれを討つてくれることは有難いのだが、自分に対しても刃が向けられるとなると許せない。上杉禪秀は「謀反人」と認定されて、これを追討するための命令「御教書（みきょうしよ）」が関東・東北の武士団に配られた。遙々と常陸国から出陣した大掾満幹らも「お尋ね者」の仲間に入ってしまったのである。（つづく）

× × ×

### 興亡の連鎖（その三） 間連資料

「上杉禪秀の乱」に因んで：

上杉氏のこと

川中島の合戦で知られた上杉謙信は、戦国時代に石岡市八郷地区に居城を構えていた智将・太田三楽斎の親友であったと言われる。本来は上杉氏では無く「長尾景虎」と云う。数奇な運命で越後

の守護代・長尾為景の後妻の子として生まれたが父親にうとまれて寺へ送られた。しかし天性は武士の子で家臣たちに推されて僧とならず、椽尾城に依り一時は兄と対立したが、和睦して家督を継ぎ春日山城主となる。守護の上杉定実を援けて越後国を掌握した。やがて関東管領・山内上杉憲政から上杉の姓と管領の職を譲られたのである。

長尾氏は、筑波山麓に土着した桓武平氏良文流（良文は平国香の弟）である。八幡太郎義家に従って後三年の役に出陣し、右の眼に矢を受けながら戦って自分を射た相手を倒すと言う恐ろしい武士の鎌倉権五郎景政から五代目・景弘が初めて「長尾氏」を称した。長尾氏は途中で血筋が絶えたように、その原因は北条氏が滅びた際に一族の一人が巻き返しを図った事件「中先代の乱」に加担したためとする説がある。元々は絶えた長尾氏を主君筋の上杉氏が継いでいるから、謙信の代で上杉になっても血筋を清算したに過ぎない。

上杉氏は藤原氏の末流である。藤原氏は不比等の男子四人が南家、北家、式家、京家に分かれたが、子孫が一番に広がった北家の五代目・藤原良門の子孫を「勸修寺（かんじゅじ）流」という。

勸修寺は「かじゅじ」とも呼ばれ、京都山科にある真言宗山階（やましな）派の大本山である。菅原道真らを登用した醍醐天皇の生母・胤子（いんし）の本願で建てられ、歴代、法親王が宗務長に任命される「宮門跡（みやもんぜき）」の格式ある寺である。良門の系統が勸修寺流と呼ばれるのは、その寺を本拠にしていたからであろうか：

菅原道真が醍醐天皇に召し出された頃に短期間だが内大臣（定員外の大臣）に任命された藤原高藤は醍醐天皇生母（胤子）の父親であり、良門の

子である。この人を「勸修寺内大臣」と表現しているから、この一族が勸修寺の創建に関わって、そこを一族の拠点にしていたことが推定できる。平安の才女・紫式部は、藤原高藤の孫娘と良門流別派（高藤の兄弟・利基の系統）藤原為時との間に生まれたから勸修寺流とされる。紫式部が結婚して生んだ娘は、有名な歌人の「大式三位（だいにのさんみ）」であるが、父親は勸修寺主流の藤原宣孝で娘が幼い頃に先立たれた。

藤原一族でも、天皇家に喰らい付いて握った権力の具合では日も当たれば日陰もある。勸修寺流は“日あたりは良くないが全くの日陰でも無い”ぐらいの地位であったのか：紫式部の旦那の時代から二百何十年か経って、鎌倉幕府の征夷大將軍になった「宗尊（むねたか）親王」の側近として勸修寺流の藤原重房という人物が登場してくる。

源頼朝が苦勞をして開いた鎌倉幕府の將軍職は源氏の潰し合いで人材が居なくなり、北条氏が藤原氏（九条家）から二代に亘り連れてきたのだが反抗心を持ったため北条氏に追放された。代わりに征夷大將軍として迎えられたのが第八十八代・後嵯峨天皇の子で、桓武平氏高棟（たかむね）流と思われる平棟子を母に持つ宗尊親王である。

高棟流は、桓武天皇皇子である葛原親王の長男・高棟王（平姓を貰って平高棟となる）の系統であり、弟の方が高見王―高望王―平国香…と地方へ伸びたのに対して、早くから都の中級官僚として広がり、清少納言が仕えた定子皇后の困窮を救うなど京都で活躍している。平清盛夫人の平時子は、この桓武平氏高棟流の系統である。

序でに触れておくその後嵯峨天皇は北条氏に起用されて即位した天皇である。「承久の乱」で後鳥羽

上皇らが幕府打倒計画を立てて失敗したために、後鳥羽、順徳の両上皇などが地位を追われて結果的に天皇要員が居なくなつた。事件の時に後鳥羽上皇の第一皇子であつた土御門上皇は、倒幕計画に関係していなかったのに希望して父親の行く四国へ流された。そこで息子の後嵯峨天皇が選ばれたのである。そのため皇位継承に自分の意思を示すことが出来なかつた。二人の息子（後深草と龜山）が皇位に即いて醜い相續争いを展開し「混乱の南北朝時代」をつくり出したのである。

話を戻して征夷大將軍となつた宗尊親王に付き従つて鎌倉へ来た勸修寺流藤原氏の重房は、その功績により丹波上杉の莊園（京都府綾部市）を与えられ「上杉氏」を称して武士となつた。上杉重房の娘は北条一族に準じていた足利頼氏に嫁し、其の子・頼重の娘（清子）も足利貞氏に嫁して足利尊氏を生んだ。清子の兄三人は重頭、頼成、憲房であるが頼成は早逝したと思われる。その子の藤景が、先に述べた長尾の家を継いだらしい。

足利尊氏が室町幕府を開いたことにより上杉氏は將軍家の縁者として幕府内での地位を高めた。尊氏は嫡男の義詮に將軍職を継がせ、弟の基氏を「関東管領」として鎌倉に置き、東北地方と関東甲信越を管轄させた。その時に足利基氏の補佐役として伯父の上杉重頭と憲房を付けたのである。

上杉重頭の子孫は「扇谷上杉」として  
— 朝定— 顕定— 氏定— 持定

— 持朝— 顕房—

上杉憲房の後は

① 「詫間上杉」として

— 重能— 顕能— 能頭— 憲孝—

② 「犬懸上杉」として

憲藤— 朝房— 朝宗— 憲春— 氏憲

(禪秀) :

③ 「山内上杉」として

— 憲頭— 憲将

— 憲春

— 憲方— 房方— 清方— 房定

(越後)

— 憲定— 憲基— 憲実—

のように子孫が広がつてゆくのであるが、それぞれの系統が権力の座を巡つて争つた。このうち、「詫間(たくま)上杉」は早くに衰え、「犬懸上杉」も氏憲(禪秀)の時代に陰謀に加担して滅亡した。戦国時代に入つて「扇谷上杉」と「山内上杉」も敵同士となり扇谷は後北条氏に滅ぼされ、山内は長尾景虎(謙信)に身売りした。

なお柿岡に居た太田三楽斎の先祖である太田道灌は扇谷の重臣で、江戸城を築くなど衰退した主家を興隆させたのだが、山内上杉の策謀により馬鹿主君の上杉定正(顕房から三代目)に暗殺されたのである。(このため扇谷が滅亡)

上杉謙信の後は甥の景勝が継ぎ、何代か過ぎて血筋が絶えた。それを継いだのが忠臣蔵の敵役で有名な吉良上野介の息子である。(吉良家は足利の支流であるから上杉氏と繋がりがあつたため)

風語り

草風亭雨露

禪もはずしたいぞなこの暑さ

我家の猫はクラー嫌いで、つけようものなら走り回つて、止めるとアピールする。お陰で我が股間は汗疹で大変だ。

コーヒープレイク

フロリダで大蛇が大繁殖

米国フロリダ州南部の広い湿地帯を持つエバーグレーズ国立公園には、ペットとして持ち込まれ、逃げ出したと思われる大蛇が、近年大量に繁殖しているという。大蛇は、アミメニシキヘビ、ボア、アナコンダ、アフリカニシキヘビなどである。いずれも体長6m、体重90kgほどになり、2mぐらいのワニが飲み込まれ、食物連鎖の頂点が入れ替わつた感がある。

02年捕獲された大蛇は2匹であつたが、08年には343匹となり現在生息数は数万匹はいるものと思われる。大蛇は普通1つの巣に100個ぐらいの卵を産むので、その繁殖率は驚異的である。水鳥や小型哺乳類など激減する突然の生態系の乱れに、州政府もお手上げの状態で、ペット動物もコントロールを失えば、重大な事態となる。

(出典:日経イェンス・05年4月号)

ダンゴ娘

若い娘が大きなダンゴを1個、丸ごとパクリと一口で食べた。それを見ていた母親が『はしたないこと、1個を一口で食べるものではないません』とたしなめた。すると娘は『じゃアこうすればいいの?』と言って、2個を一度に頬張つた。

## 【特別寄稿】

今月は、原爆・終戦等の記念行事の月。風の会ではこれまで、強く意識したわけではないが太平洋戦争や原爆についての思い、考えを書いてこなかった。しかし、今月、これは風の会にとって一つの快挙と言える事だと思うが、戦争・原爆・被爆国日本について匿名ではあるが、投稿を頂いた。タイトルも「さーて、どうするか？」と洒落ている。早速ご紹介したいと思う。

『さーて、どうするか？』 (石岡市) AK

この時期になると毎年、戦争・原爆に関する記事が、報道が、ドラマが、ドキュメントがやたら多くなる。このこと自体は、風化させない…と言う視点に立てば良いのかも知れないが、しかし、これら様々な露出が本当に風化させない事に役立っているのだろうか？ 最近第五福竜丸が世界遺産に登録されたとのニュースが報じられていた。この事は、広島原爆ドームと同様二度と過ちを犯さない戒め…？ 果たしてそうだろうか、むしろ過去の遺産として、現実を直視せず過去の記念として葬り去ってしまったていないだろうか？ 広島もそうだが、福竜丸の乗組員たちは、今も苦しんでいないだろうか？ もういいだろう…：しよながなかった…：本当に二度と犯させない過ち…：その根源を直視しなければ、また犯してしまうに違いない。

日本は今年で原爆投下から66年目を迎える。嘗てある防衛大臣が「あれ（原爆投下）で戦争が終わった、という頭の整理で今、しようがないと思っている」と発言し、世論の反発を浴びて辞職を

余儀なくされた事はまだ、記憶に新しい。昭和天皇も40年前の記者会見で「（原爆投下は）遺憾に思うが、戦争中であることですから、広島市民に對しては気の毒であるが、やむを得ない」と発言、殆ど批判の声は出ず、大半の国民は「しようがない」という意識。

また原爆投下で終戦になり、間違うと北海道がソ連に取られてしまっていた…という意味の言い方もある。これは明らかに長崎について語っているとされる。これまでの原爆投下を巡る発言の中では目新しいが、むしろ考え方が間違っている。米国でも、ある核不拡散担当特使が「原爆の使用は連合国側の数十万の生命だけでなく、文字通り何百万人も日本人の命が更に犠牲になるかも知れなかった戦争に終をもたらした」と発言している。日米両国で、いまだにやむを得なかったと言う「原爆神話」が根強い。

前述の特使の発言は戦後歴代米国政府の公的な見解であるし、これについての最大の問題は、「軍事的な必要性の有無によって原爆投下の是非が論じられている」。「必要性」があるがなかるうが、核兵器は如何なる理由があっても絶対に使用してはならない。開発することも人道に認められないという認識が、先ず前提とされねばならない。それを無視して、「使用しなかったら犠牲者が何人だった」などと論議するのは可笑しいし、米国にはこの考えはない。

結論から先にいえば、「原爆投下によって降伏が早まった」のではない。軍事的には原爆は必要だったのに、米国は原爆投下まで戦争を長引かせたのだ。その結果、より多くの犠牲者が出た」というのが歴史の真実です。それは、原爆が未完成

だった、45年春と、完成した7月以後の米国の対日政策を比較すればわかる。先ず確認しておかなければならないのは、日本が降伏することになった決定的な要因は、12日に入電したバーンズ國務長官の「回答」即ち、「日本政府の形態は日本国民の意思によって決定される」によって、「天皇制が維持できる」と判断したからなのである。

米国は「天皇制さえ容認すれば日本は降伏する」ということを十分承知していた。天皇制を容認・温存して占領に利用するという路線は、43年当時から基本的な対日政策としてあったのだ。トルーマン大統領たちは日本が終戦工作に動き出したのを知って焦り、原爆開発のスピードアップを命じた。ポツダム会議の開催日も当初の6月から原爆実験が予定されていた7月中旬に延期した。ヤルタ会議で決まったソ連の参戦も蒋介石を使つて延期させようとした。

原爆実験の成功後、7月26日にポツダム宣言が出されたが、実は原爆投下が発令されたのはその前日の25日なのである。その上「ポツダム宣言」には次のような細工がしてあった。

- ① 外交ルートを通じた正式の文書でない。
- ② 回答期限がない。
- ③ 天皇制容認に触れていない。
- ④ ソ連の不参加。

つまり最初から日本に拒否されるようにし、それを受けて米国民が怒るように計算して、原爆投下に繋げようという意図が含まれていた。つまり、米国はどうしても原爆を使いたいために天皇制容認の意図を隠し、原爆投下前の降伏を回避しようとした。極めて非人道的な行為。実際に投下した効果を確認するまで心配、そしてソ連軍が参戦し

ても緋本の降伏を待つことなく3日後に2発目を長崎に投下した。最初から2発でワンセットだったのである。広島はウラン型で長崎はプルトニウム型。警告もせずに2種類の原爆の人体実験をしたかったのだと言える。だから相手が既に降伏に向けて動いている事を知りながら、原爆を投下したことは明らかである。

もう一つ、二発目がなければソ連の参戦で日本が降伏した形となり、ある大臣がいうようにソ連の発言力が高まることを押さえる狙いがあった。例えば、ノーベル物理学者の英国のパトリック・ブラケット卿は、「原爆投下は第二次世界大戦の最後の軍事作戦というよりは、戦後冷戦の最初の軍事作戦であった」と指摘しているように、米国には長期的な視野に立った戦略的意図があった。無論この作戦の非人道性はいくら強調してもし過ぎるということはない。実は当時の日本政府は「非戦闘員の大量虐殺は戦争犯罪で、許されない非人道的行為だ」とするしつかりとした抗議声明を出している。

ところが戦後の保守党政府は、占領下の鳩山一郎を除き、米国に従属する道を選び何もいわなかった。一方リベラルの側も、アジア各国に対する「加害責任」を意識するあまり「罪悪の報いで広島・長崎が人身御供になった」とか、米国流の「原爆神話」の容認へと流れ、その点では保守と大差のない状態になっている。

また「唯一の被爆国」といういいかたが事実に反していて、外国人被爆者の切り捨てになっている、という認識が薄い。連合軍の捕虜も含む15カ国7万人以上が被爆し、約4万人が犠牲になっているという事実を殆どの国民が知らないし、学校

でも教えない。これでは、一種の「被爆ナシヨナリズム」といわれても仕方がない。韓国・朝鮮の原爆慰霊碑が、広島では以前、公園から外に追いやられていたことがあるのだが、「被害」の部分を突出させることで、自身の加害を癒してきたという部分もある。ホロコーストを強調することで、現在パレスチナでのやり方を正当化するイスラエルの論理と重なる部分がある。

原爆投下は「日米双方の合同作業であった」という視点。事実認識の前提として、日本は、降伏すべき時点、降伏できた時点で降伏しなかった。45年2月には「米国との講和以外に道はない」という、「近衛上奏文」が出されている。だが結局、天皇が自分の身がどうなるかわからなかったため「国体護持」に固執して、降伏を先延ばしにして原爆投下が引き起こされてしまった。当時の天皇と政府の責任は大きいと言わざるを得ない。降伏するチャンスは何度もあった。ポツダム宣言も直ちに受諾すべきであった。それなのに「聖断」などと天皇のお陰で戦争が終わったという見方すらもある。その上、日本側も原爆を作ろうとしていた。陸軍は理化学研究所の仁科良雄博士に、海軍は京都大学の荒勝文策教授に原爆の開発を委託している。軍が原爆を持つとしていたのは事実で、仮に完成でもしていたら迷うことなく使用していたであろう。道義的に米国だけを一方的に責められないのは明らかな事である。

〔週刊金曜日〕2007.07.08.10号、今こそ「原爆神話」の解体を！  
鹿兒島大学教授・木村朗さんに聞くを参考に書きました

## ギター文化館

### 2010 CONCERT SERIES

8月8日(日) PM3:00~高橋行進VS森朗 ジャズライブ

8月22日(日) PM3:00~佐藤純一VSタケオ・サトウ ジョイントコンサート

9月12日(日) PM3:00~村治奏一ギターリサイタル

10月3日(日) PM3:00~長谷川きよしコンサート

10月11日(月) PM3:00~吉川二郎ギターリサイタル

10月17日(日) PM3:00~4本の花 若手女性4人によるギターコンサート

11月7日(日) PM3:00~ハーブの調べ

11月21日(日) PM3:00~福田進一ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35

☎ 0299-46-2457

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の声(音)を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で・・・、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465

TEL0299-55-4411



## 【風の談笑室】

春には気温が上がらず、もしかしたら冷夏なのかと心配させられたのであったが、梅雨明けと同時に猛暑の夏となってしまった。おまけに神出鬼没なゲリラ豪雨である。

7月25日、26日と石岡を襲った豪雨は凄かった。25日は東京奥多摩に出掛けていて突然の豪雨に襲われた。豪雨の中、狭い奥多摩街道を緊急車両がひっきりなしやってくると思ったら、秩父の溪谷に救助ヘリが墜落したのだという。東京の豪雨を逃れ、戻って来ると、土浦辺りから雷が鳴り始め、石岡駅に着いたら超土砂降り。駅舎は足止めを食っている人でごった返している。正面の大通りには滝の様な水が流れ落ちていた。石岡駅に一時間程動けずにいた。

少し小降りになり、タクシーが来たので走り出て乗る。ところがあちこちの道路が水没して、交通止めになっていて、かなりの回り道が必要になるかもしれないと言われた。その通りあちこちで水没による大渋滞があり、歩いても15分程度なのに20分以上かかってしまった。

猫は一年に三日だけ暑さを知る、という様な事が言われる。我家の猫を見てみると、そんな諺が納得いく。というよりも、我家の猫は一日も暑がらない。このところ連日家の中の温度は35度を指しているのであるが、全く熱がることをしないし、クーラーをかけると何でかけるのだと狂ったように走り回り、クーラーを止めるとアピールする。猫を飼っている人の話しを聞

くと、家の中の一歩涼しい所に寝てるとい。しかもクーラーを入れるとやって来きますよ、と言うのである。

我家の猫「耳」ちゃんは、朝から、我家で一番熱く風の流れない、納戸に気持ち良く寝ている。納戸だから締め切りにしておくのと懺るので風を通すのであるが、風が流れ始めると出てきて、我家で二番目に暑い私の机の下に入るのである。部屋の壁に沿ってL字型に配置した机の一番奥に、具合よく自分一人が寝られるスペースを見つけ、そこに入り込んでしまうのである。クーラーをつけても、扇風機をまわしてもそこだけには風がとどかないのである。一番困るのは、日中一番熱い時にやって来て、膝にだっこしろとせがむことである。

毎月第二土曜日の午後7時から、いしおか補聴器さんで、ふるさとの歴史・文化の物語を朗読に聞く夕べの会を開いています。8月は夏休みさせてもらいます。次回は9月の第二土曜日（11日）。打田昇三作「興亡の連鎖6・失意の谷」朗読は、ことば座の白井啓治。

この朗読会も9月で十回目となります。第1回のシリーズ「国分寺」に始まり、シリーズ2は、常陸大掾氏の滅亡の始まりと言われる難台山城落城にまつわる周辺談としての「興亡の連鎖」。興亡の連鎖は、9月が最終回となり、その後、年内は石岡周辺の伝え話の朗読を行います。毎回、朗読が終わった後に、作者を囲んでの談笑会は、時間の経つのを忘れてしまう程の活況です。

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もお陰様で五年目に入りました。当会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、ふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費として)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井啓治 0299-24-2063

打田昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com>

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2  
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com>